「熱帯林業」新シリーズ 70 号発行に向けて

桜　井　尚　武

「熱帯林業」誌が新シリーズになってから 70 号を数えることになった。年 3 号発刊だから，23 年余りが経過したことになり，喜ばしいことである。長い年月も，過ぎてしまえば，あっという間で，まさに光陰矢のごとしである。

1960 年に熱帯材の輸入が自由化されて，熱帯林とその木材について，新たな，しかも密接な関係が始まった。戦前に多くの経験や情報が蓄積されていたが，戦後 20 年余り，その活動や研究は途絶えていたように思う。特に，1960 年代後半に大学の林学科にいた私には熱帯林は未知のものであり，とても遠いものだった。林業試験場に入った 1974 年に，上司からカリビアマツのフォックステールについて調べよといわれて，戸惑ったことを思い出す。この頃「熱帯林業」が発刊されたのは，林業・林学の関係者間で高度成長経済下，木材供給基地として限りない可能性を感じさせた熱帯地域の森林・林産の事情・情報を共有しようということだろう。

私と「熱帯林業」の関わりは，1983 年 8 月の熱帯林業協会が主催した「キナバル山の花・樹・岩 8 日間の旅」に参加したのが始まりである。これは「熱帯林業」の主催者北野至亮氏が企画したものと今でも思っている。今思えば錚々たるメンバーが居て，キナバル山とサバ州の熱帯林を実際に見て歩いた貴重な旅であった。今年，私のゼミの学生が 2 人でキナバル山を巡るツアーに参加して楽しかったよと言って，写真をたくさん撮って帰ってきたし，インターネットで探すと多くの人が沢山のキナバルツアーのレポートを掲載していて，普通の手軽な観光地になっているようだが，当時は随分と秘境に行ったなあという感じだった。私も若かった。白髪の北野さんが元気で，オランウータンのリハビリで有名なセピログの森林に分け入ったときに色々と話してくれた。一番印象に残っているのは，ha 当たり 10 本の採算に合う木があるかどうかで，その森林の伐採権を得るかどうかを判断する，この林を歩いた限り 13 本はあるか

Shobu Sakurai : On the Issue of No. 70 (New Series) of “The Tropical Forestry”
日本大学生物資源科学部教授

ら絶対買いだ，と梢を見上げて，あの木この木と教えてくれたことである。

この頃から熱帯林の伐採問題が激しくなってきた。自然保護問題は1960年代から国内で激しさを増していたが，70年代に入ってからは海外でも大きな問題になり始めていた。Whitmore の Tropical forest が出たのがこの頃で，熱帯林に関する情報が洪水のように溢れ出してきていたが，国内ではまだまだ貧弱な情報しかなかったように思う。熱帯林は一度伐採などの破壊を受けると二度と回復しない，できない，とマスコミなどが報道していた時代である。

写真 1　ナショナルパーク本部からのキナバル山

写真 2　キナバル登山ガイドとポーター

この頃は精粗様々な情報が飛び交っていた。この時代に，熱帯林，熱帯の林産，熱帯の森林と人間社会に関する質の良い情報，実際の経験で得た情報を集め，交換して，熱帯林に関与する人々に提供しようという本誌の心意気は誠に天晴れなものであった。1990 年代に本誌の編集委員をさせて貰ったが，当時の理事長の秋山智英氏が編集会議に毎回出席して，叱咤激励し，また的確な意見を述べて下さっていたことを思い出す。編集委員長の浅川澄彦氏の下で随分と質の高い議論を交わした。もう一つ忘れられないのは，同じ編集委員であった池田俊弥氏の，熱帯林問題はそこに住んでいる住民，すなわち社会との関係，これを見過ごしてはいけないという，再々にわたる指摘である。私はこの編集委員会とこの「熱帯林業」誌に随分教育して貰ったと思う。現在，私のいる日大の造林の研究室にこの冊子を開架して，学生達の勉強に役立って欲しいと願っている。

これからも，広く森林に関する多くの情報を集め吟味して掲載し，間違いのない熱帯林の取り扱いを指導する貢献を続けて欲しい。